

静岡県立美術館

第三者評価委員会評価報告書

平成 28 年 2 月

静岡県立美術館第三者評価委員会

目次

はじめに	1
------------	---

【報告編】

1 平成 26 年度 静岡県立美術館第三者評価委員会評価シート	5
---------------------------------------	---

【資料編】

1—2 展覧会に関する自己点検評価表（平成 26 年度）	10
1—3 調査・研究に関する自己点検評価報告書（平成 26 年度）	17
1—4 定性評価の状況（平成 26 年度）	27
2 静岡県立美術館評価業務 報告書（平成 27 年 3 月）	37
3 平成 26 年度第三者評価委員会での意見と対応状況	131
4 平成 26 年度設置者の取組状況	133

はじめに

本委員会は、評価を通じて静岡県立美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進することを目的として、平成 18 年 9 月に発足しました。

本委員会の使命は三つあります。第一は、県立美術館が自ら行う自己評価（一次評価）に対して、外部の視点から二次評価することです。第二には、美術館に対する県庁（本庁）の支援体制を委員会が独自の視点に立って評価することです。第三は、美術館の運営及び評価の方法について、次年度の改善に向けた提言をすることです。

本年度の本委員会の活動としては、平成 27 年 7 月に第三者評価委員会を開催し、平成 26 年度の美術館自己評価に対する二次評価、設置者の取組に対する意見、今後の改善課題について討議しました。この報告書はその結果に基づき作成したものです。

本報告書では、最初に本委員会の報告を含めた評価シートを 1 として掲載し、評価のための資料を 1 - 2 から 4 及び 2 として掲載しました。

本報告書が県庁と県立美術館のますますの発展と充実に資することを願います。

平成 28 年 2 月

静岡県立美術館第三者評価委員会

委員長 村田 眞宏

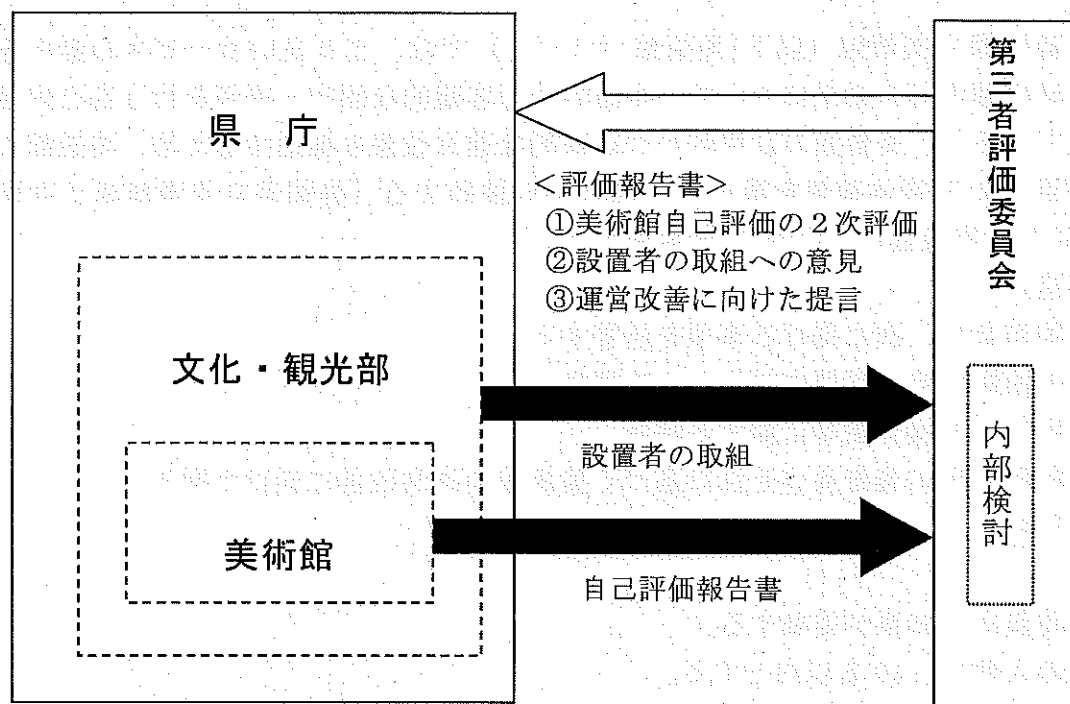
静岡県立美術館第三者評価委員会委員名簿（敬称略、五十音順）

	候補者	役 職
委員長	むらた まさひろ 村田 眞宏	豊田市美術館館長
委員	かみやま まり 神山 眞理	日本大学教授
〃	きんばら ひろゆき 金原 宏行	豊橋市美術博物館館長
〃	たなか ひらき 田中 啓	静岡文化芸術大学教授
〃	にし まさひろ 西 雅寛	協立電機株式会社代表取締役社長
〃	やまぐち ゆみ 山口 裕美	山口裕美コンテンポラリーアートラボ 代表

平成 27 年度の活動

会議名等	内容等
第 1 回第三者評価委員会	日時：平成 27 年 7 月 30 日（木）14:00～16:30 会場：静岡県立美術館 講座室ほか 内容：（1）平成 26 年度の取組に対する評価 （2）企画展視察

評価システム全体図（第三者評価委員会の位置付け）



静岡県立美術館第三者評価委員会設置要綱

(設置)

第1条 静岡県立美術館（以下「美術館」という。）では、より良いサービスの提供を図るため、事業の運営等の効果について、多面的かつ客観的な測定・評価を行う自己評価活動を実施しているが、美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進するため、美術館の自己評価及び県庁の支援体制等を第三者の視点から評価する「静岡県立美術館第三者評価委員会」（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会は、次に掲げる事項を所管する。

- (1) 美術館の自己評価に対する2次評価
- (2) 県庁の支援体制等に関する評価
- (3) 評価結果の報告及びそれに基づく美術館の運営改善に向けた提言
- (4) その他、この委員会の目的達成に関すること

(委員)

第3条 委員は、知事が委嘱する。

- 2 委員の人数は、10名以内とする。
- 3 委員の任期は2年とする。ただし、その委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 4 委員は、再任されることができる。

(委員長)

第4条 委員会に、委員長1人を置く。

- 2 委員長は、知事が指名する。
- 3 委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

(会議)

第5条 委員会は、委員長が招集する。

- 2 委員会は公開とし、その傍聴に関して必要な事項は、別に定める。
- 3 委員会は、必要に応じて個別課題検討のための分科会を置くことができる。
- 4 委員会及び分科会には、委員以外の者に出席を求めることができる。

(事務局)

第6条 委員会の事務を処理するため、事務局を静岡県文化・観光部文化政策課内に置く。

(その他)

第7条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に必要な事項は、委員長が別に定める。

附 則

- 1 この要綱は、平成18年9月21日から施行する。
- 2 この要綱の施行の日に委嘱する委員の任期は、第3条第3項の規定にかかわらず、平成20年3月31日までとする。

(最終改正 平成23年6月17日)

【使命】＝美術館をめざす姿
 静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。そのためにコレクションを基盤として人々が美術と出会い新たな価値を見出す体験の場をより多く提供するとともに、地域をパートナーと考える経営を行い、日本の新しい公立美術館となります。

基本方針	計画(P)			実施状況(D)		評価(C)	
	重点目標	評価指標	目標	実績	自己評価	第三者評価	
A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します	1 県民の視点に立ち「静岡らしさ」を表現できるよう、文化資源を十分活用した展覧会事業を展開します	1 展覧会の来館者数(人)	140,000 人	94,664 人	【成果】 ・本県中かりの下岡蓮枝や石田徹也をとりあげ、学術的に意義ある企画展や、サブカルチャーを含む冒険的な「美少女の美術史展」などを開催したほか、当館収蔵品を活用し、見応えのある展覧会(風景解剖学)を開催することができた。 ・「美少女の美術史展」では、新しい来館者の獲得に成功し、目標値を上回ることができた。 ・また、今年度の他館と連携した取り組みの最大の成果としても「美少女の美術史展」の開催を挙げておきたい。 ・作品収集では、当館のコレクションの方針に沿って、江戸時代後期の風景画の新しい傾向を示す椿椿山《山海奇勝図》を購入することができた。そのほか、寄贈された作品も予想以上の点数にのぼり、コレクションの充実をはかることができた。 【課題】 ・結果として来館者数は開館以来の最低を記録し、10万人を割った。 ・展覧会の入館者数の回復をめざす。かつての「文明展」やそれにかわる県民に親しまれ、足を運んでもらえる大型展覧会企画を組み込むことを今後の課題とする。 ・作品の購入予算がゼロに据え置かれている状態は、美術館として望ましくない。今後の美術館の活動によって、予算の復活に各方面からの理解を得られるように努める。 ・近年、展覧会の入館者数が減少傾向にあり、目標来館者数を過去5年程度の平均値により、設定するなど見直しを検討する。	① 文明展がなかったことが、来館者が伸び悩んだ一つの要因であり、文明展開催は重要な意味をもっている ② 当初の想定よりも出足が鈍い場合は、会期中でも他施設との連携などの様々な工夫を、機敏かつ柔軟に対応することが重要である。日本平動物園との連携など、様々な工夫が「アニマルワールド展」の来館者が目標を上回った要因の一つである。 ③ 地元経済界を集めた新聞社等主催の会合を通じて宣伝をしたり、チケットの割引販売を行ったりどうするか。 ④ 静岡市美術館と共同で大きな企画展を双方で行うなどの工夫が必要である。 ⑤ 入館者に対するサービスの一環として、Wi-Fi環境を整え情報の送受信環境を向上すべきである。 ⑥ 展覧会の内容や質も見ていく必要があり、来館者目標を達成しなかったから悪いというものではないと思うが、一方で10万人という数字はシンボリックであり、今後死守すべき目標の目安である。 ⑦ 人口が減っていくので、来館者も減っていくのは避けられない。この先、もっと環境が悪くなるという前提で展覧会をどうしていくかを考えるべき。1つは市にできないこと。もう1つは県内全域、県外から利用者を含みに集めるか。 ⑧ 県庁と組んで、県立大学だけではなく芸術に係る大学を訪問するなど、新たに開拓し、大学を有効利用すれば幅が広がる ⑨ ポスター一枚のデザインに惹かれるかどうかで入館者数が変わるので、デザインは非常に重要である。 ⑩ 県民が気づいていない潜在的な欲求を掘り起こす必要がある。ニーズを把握し、それを顕在化させ「この地域社会になぜ、今、提供し見てもらうか」という問いかけが重要 ⑪ 目標値を高めにするのは意欲的ではあるが、人口減少時代に即して下げてもいいのではない	
		2 自主企画・企画参加型の展覧会の回数(回)	4 回	4 回			
		3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	88.0 %	87.2 %			
		4 展覧会における新規来館者の割合(%)	20.0 %	28.7 %			
		5 収蔵品展の観覧者数(人)	20,000 人	8,530 人			
		6 収蔵品の公開件数(件)	500 件	527 件			
		7 展覧会に対する外部評価【定性】	—	別添			
	2 他の美術館・大学・地域の専門機関と連携し、新たな公立美術館の姿を示します	8 内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	14 回	10 回			
		9 他の美術館や大学と連携した取り組み件数(回)	5 回	14 回			
	3 調査研究を美術館活動の基盤と考え、成果を広く公表することで質の向上を図ります	10 公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	別添			
		11 調査研究の発表回数(回)	10 回	10 回			
		12 作品購入件数・価格(件・千円)	— 千円	1 千円 15238 千円			
		13 作品寄贈件数・価格(件・千円)	10 件	41 件			
	14 調査研究に関する外部評価【定性】	—	別添				
B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します	1 美術館の役割を明確にし、業務の再構築を図るとともに、学校・県民のニーズを先取りするプログラムを開発、普及します	15 学校教育と連携した取り組み数(件)	300 件	271 件	【成果】 ・学校団体向けボランティアとの鑑賞ツアーの利用件数が増え、学校現場での鑑賞教育に協力する機会が増えた。実技系のプログラムも、企画展・収蔵品展と関係する内容にし、美術館ならではの鑑賞と制作の場を提供することができた。 ・地域との連携については、大学や地域のキーパーソンとの連携が進み、例えば静岡大学と協力しておこなった事業では、地域の若手アーティストとともに充実した展示を実現させた。 ・また、地域住民との連携も、ロダン館20周年記念記念事業のほか、商店街の催しに出店を出すなど、交流を深めた。 【課題】 ・教育普及事業の推進をめざして、他館で活動している教育担当者によるワークショップを試験的に開催した。当館の教育普及事業をより充実させるために、美術館の教育普及の専門的知識をもつスタッフの必要性を検討したい。 ・地域との連携については、「地域に根差した美術館」を目指すべく、様々な取組を定着していくことが課題である。	① 地域や学校との連携は重要で、それ自体がゴールではなく、化学反応するように新しい取組になるとか、将来の来館者に育つとかいう感触を得られるかも重要。数字では捉えられないものであるが、定性的に判断したら良い。 ② 連携することから始まり、状況に応じて目的や向かうところを共有することは重要。 ③ 質の高い芸術活動と普及活動には企業の力が活用できる。例えば富士山等は高名な作家は多くが作品を描いているので、それらの企業所蔵品を集めた展示会などを開催することも興味を引くと思う ④ 友の会会員に対する特典や寄附を受けた際の顕彰方法を工夫することも取組としては有効である。	
		16 鑑賞系プログラム数(件)	18 件	36 件			
		17 コレクションを活用したプログラム数(件)	18 件	36 件			
		18 普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート【定性】	—	別添			
	2 静岡県立美術館の活動をアピールする普及事業を開催します	19 講演会等の開催件数(回)	160 回	164 回			
		20 学芸員のフロアレクチャー等の数(回)	120 回	97 回			
	3 地域住民、企業、友の会、ボランティア等との連携を深化させ、美術館を核とした地域づくりに努めます	21 地域住民等と連携した取り組み数(件)	6 件	26 件			
		22 館内空間を生かした催事の件数・参加者数(件・人)	90 件 5000 人	59 件 10951 人			
C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます	1 県民が「静岡県の誇りと自慢できる美術館」を目指し、様々な戦略的広報を発信していきます	24 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)	70.0 %	73.0 %	【成果】 ・「情報の入手のしやすさ」については、改善されてきている。 ・ホームページについては、可能な限り、新しい情報を提供すべく更新の頻度を上げている。 ・広報についても、館内「広報委員会」を設置して、アマリスの充実、Facebookの新設など、引き続き、積極的な活動をした。 【課題】 ・ホームページ、FacebookなどのSNSを積極的に活用しているが、アクセス件数、満足度などは、減少傾向である。今後は、詳細な分析をし、課題を明確にしたい。 ・「ロダン・ウィーク」については、5,000人を超える来館者を数えたが、入館者に反映できなかった。今後のイベントでは展覧会入館者増につなげる方策を検討する。また、目標値8万人との乖離が目立つ。目標自体の見直しが必要。	① 静岡空港利用者に富士山のコレクションを見てもらえるよう中国に向かっての広報を、広域的に他県とも連携して充実すべき。 ② 外国人に宣伝してもらえるよう、戦略的な広報計画が必要である。 ③ 大学生等の若者にインターン的にSNSなどの広報を依頼し、面白い情報の発信に挑戦すべきである。またそのためのスタッフを配置していくべき。 ④ 携帯画面から情報を快適に見られるよう、スマホ対応のホームページにする等、リニューアルは2、3年で対応することが求められる。また、外国人への対策も戦略的に行うのも大切。	
		25 ホームページのアクセス件数(件)	600,000 件	243,000 件			
		26 ホームページの満足度(%)	75.0 %	72.5 %			
	2 観光業界等と連携した新たな広報手段を開拓し、県立美術館の魅力を積極的に広報します	27 観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数(件)	5 件	9 件			
		28 広報手法における新たな取組状況に関する美術館職員のレポート【定性】	—	別添			
	3 ロダン館、富士山絵画を「静岡県立美術館の顔」としてその魅力を発信していきます	29 ロダン館の入場者数(人)	80,000 人	51,938 人			
30 美術館利用者数(人)		250,000 人	237,463 人				
D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます	1 お客様の満足度を高める施設を目指し、環境整備に努め、利便性を高めます	31 来館者のアクセス満足度(%)※再掲 ※上段:公共交通機関利用、下段:自家用車利用	80.0 %	74.6 % 84.2 %	【成果】 ・来館者アクセス、レストラン・カフェ、ミュージアム・ショップいずれも満足度は、目標を達成できた。 ・公共交通機関利用者については、バス会社への増便の要請など、アクセス満足度を向上させるように努める。 ・鑑賞環境の満足度については、高い数値を示している。 【課題】 ・施設及びサービス満足度は高いが、今後、さらなる美術館施設の充実を目指して、より良い他館の事例を調査し、利用者満足度をさらに高めていく。	① 入館者増のためには、観光バスが止まれる駐車場の整備が必要である。 ② 少子高齢化や税収の今後の成り行きから、築後60年での改築は難しい。今の建物をいかに補修し長持ちさせるかの現実的な延命策を図るべきである。 ③ 開館から30年近く経過し、県立美術館の機能や活動、施設が今の世の中に適しているかの検証が必要であり、20年30年先を見据えた美術館のあり方検討をし、それを踏まえた改修を計画すべき時期に来ている。	
		32 レストラン・カフェに対する満足度(%)	70.0 %	70.4 %			
		33 ミュージアムショップに対する満足度(%)	85.0 %	87.2 %			
		34 鑑賞環境に対する満足度(%)	90 %	92.8 %			
	2 施設再始動検討を始め、より県民に愛される美術館を目指します	3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)※再掲	88.0 %	87.2 %			
		21 地域住民等と連携した取り組み数(件)※再掲	6 件	26 件			
		30 美術館利用者数(人)※再掲	250,000 人	237,463 人			
		32 レストラン・カフェに対する満足度(%)※再掲	70.0 %	70.4 %			
		33 ミュージアムショップに対する満足度(%)※再掲	80.0 %	87.2 %			
		35 美術館利用者数(人)	250,000 人	237,463 人			

設置者の取組	取組の状況	第三者評価委員意見
	・庁内各部署と連携し、県の広報ツールを最大限活用した広報の実施のほか、展覧会ゆかりの地で発行されている地元ミニコミ誌に情報を掲載依頼するなどした。 ・施設整備について観光費を活用してロダン館天井照明設備更新工事を実施し、必要な修繕・更新を適時に行えるよう調整した。	① 大学にも美術館職員とともに営業活動を行うべきである。 ② 2005年に静岡県立美術館評価委員会が提言した「評価と経営の確立に向けて」に立ち戻り、どこが変わって何が変わっていないのかを検証してみる必要がある。

基本方針	A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します
------	--

計画(P)			実施状況(D) H27.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 県民の視点に立ち「静岡らしさ」を表現できるように、文化資源を十分活用した展覧会事業を展開します	1 展覧会の来館者数(人)	140,000 人	94,664 人	※収蔵品の公開件数は、収蔵品展(7室)、企画展(アニマル・ワールド展、風景解剖学)、他館への貸出件数を合計したものである。	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年度の展覧会活動の成果としては、企画展での当館収蔵品の効果的活用を挙げたい。それは、重点目標にある県の文化資源の活用という観点からも、評価に値しよう。 収蔵品を活用した企画展としては、収蔵品と寄託品を最大限活用した「風景解剖学」のほか、「アニマルワールド」、「石田徹也展」を挙げておく。「風景解剖学」では、第1室から6室までの通常の企画展スペースに、第7室の収蔵品展スペースを加えて、本館2階フロア全体で、収蔵品の質の高さと140点を超える量の豊かさをアピールした。風景画を構成要素に分解してみるという、新しい見方を提示して、新たな感動をもたらすことができた。「石田徹也展」も、100点を超える作品のうち、代表作20点は館蔵品である。海外からの借用依頼も当館所蔵の代表作に集中しており、当館の石田作品の文化資源的価値は向上を続けている。「アニマルワールド」でも、出品作の2割弱を館蔵品が占めた。また、「佐伯祐三展」は、当館がその最高傑作のひとつを所蔵しているほか、同世代の日本洋画を所蔵していることなど関連づけて、年度当初の企画展に選んだ。1階の名品コーナーに館蔵品「ラ・クロッシュ」を展示し、展覧会の導入とした。 つづいて成果として挙げたいのは、静岡県出身の作家を紹介する展覧会を開催できたことである。「石田徹也展」の石田は焼津出身、そして、「下岡蓮杖展」の下岡蓮杖は下田出身の、日本の写真史の黎明期に活躍した写真家にして画家でもあった人物である。前者の観覧者一万人目となったのは、焼津出身の若い女性であり、後者の展覧会では下田商工会議所との広報面での協力を得ることができた。 さらに、新しい観客層を獲得したことも成果として挙げたい。「美少女の美術史」では、通常当館の入館者に占める高校生・大学生の割合は5%程度であるところ、この展覧会では、20パーセント超という結果になった。この展覧会が、感受性豊かな若い人々に来館のきっかけを作ったといえ、そうした人々の生活のなかに美術館へ行くという行為が今後も根付くことを期待する。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年度は、動員数が開館以来の最低を記録した。「佐伯展」「下岡蓮杖展」「風景解剖学」が設定した目標を下回った。 期待していた人数の県民に足を向けてもらえる展覧会にはなっていなかったということである。しかし、いっぽうで、来館していただいた方の展覧会に対する満足度や外部評価は高く、質のよい展覧会活動を継続できている。展覧会の質と動員数とが連動しない状況を、今後どのように改善していけばよいのか、行き詰まり感がある。かつては大規模な集客が見込める各種文明展が巡回されていたが、昨今はそうしたものが少なく、その代わりに「ちびまる子ちゃん」などのテレビアニメ展や、タレントの展覧会などが多く企画され、動員数も得ている。現段階では、そうした展覧会は基本方針に合わないかと判断している。そうしたなかで、新しい試みとして、だれでもがその名前を知っている有名写真家の大規模展覧会を来年度初頭に開催するので、その結果を、今後の展覧会企画のあり方を考えるひとつの手掛かりにしたい。
	◆佐伯祐三とパリ(46日間)	35,000 人	18,923 人		
	◆下岡蓮杖(37日間)	12,000 人	5,269 人		
	◆アニマルワールド(37日間)	17,000 人	18,065 人		
	◆美少女の美術史(50日間)	15,000 人	21,147 人		
	◆風景解剖学(32日間)	11,000 人	6,817 人		
	◆石田徹也展(52日間)	20,000 人	15,913 人		
	◆収蔵品展	20,000 人	8,530 人		
	◆移動美術展	10,000 人	2,122 人		
	2 自主企画・企画参加型の展覧会の回数(回)	4 回	4 回		
	3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	88.0 %	87.2 %		
	4 展覧会における新規来館者の割合(%)	20.0 %	28.7 %		
	5 収蔵品展の観覧者数(人)	20,000 人	8,530 人		
	6 収蔵品の公開件数(件)	500 件	527 件		
7 展覧会に対する外部評価【定性】	—	別添			
2 他の美術館・大学・地域の専門機関と連携し、新たな公立美術館の姿を示します	8 内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	14 回	10 回	<p>【成果】「美少女の美術史展」では青森県立美術館、島根県立石見美術館の学芸員との共同企画を成功させ、各地で講演会を開催したことを特筆したい。そのほか、静岡大学との共同企画(アートマネジメント力育成事業やロダン館活用授業)、静岡県博物館協会のシンポジウム等の活動(防災活動)、富士市立博物館所蔵品の調査への協力、全国美術館会議地域美術研究部会幹事や他館の評価部会副会長を務めるなど、他の美術館、博物館や大学との連携を、活発に継続させた。</p> <p>【課題】今後も、こうした連携を継続的に進める。</p>	
	9 他の美術館や大学と連携した取り組み件数(回)	5 回	14 回		
	10 公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	—	別添		
3 調査研究を美術館活動の基盤と考え、成果を広く公表することで質の向上を図ります	11 調査研究の発表回数(回)	10 回	10 回	<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 館長出席のもと、学芸員による研究会をほぼ毎月のペースで実施し、コレクションについての研究を深めた。 椿椿山《山海奇勝図》を購入することができた。本作品については専門家より、「椿椿山の傑作である。本作と一連をなす三巻はすでに重要文化財に指定されている。本作も重要文化財に指定されてしかるべきである。」との評価をいただいた。 寄贈が、質と量ともに充実してきており、当館コレクションの核となりつつある。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> 充実したコレクション形成には、学芸員の研究の継続と深まりが重要である。作品購入費がゼロになっていることは、コレクション形成にとっての大きな障害であり、今後、予算復活を関係各所に働きかけていく必要がある。 	
	12 作品購入件数・価格(件・千円)	— 千円	1 件 15238 千円		
	13 作品寄贈件数・価格(件・千円)	10 件	41 件		
	14 調査研究に関する外部評価【定性】	—	別添		

基本方針 B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

計画(P)			実施状況(D) H27.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 美術館の役割を明確にし、業務の再構築等を図るとともに、学校・県民のニーズを先取りするプログラムを開発、普及します	15 学校教育と連携した取り組み数	300 件	271 件	今年度の普及・教育プログラムでは鑑賞系の実施件数が増加した。小学校・中学校・特別支援学校の利用が増加した。平成27年度に運用するアートカードについて出張講座や来館時での試験実施や紹介を重ねたところ、学校種別や担当教員の教科を問わず、多くの利用希望が見受けられた。一方で粘土教室や絵の具教室に代表される美術館教室内の制作系プログラムでは全ての団体からの要望に応えられないため、近年は抽選による落選団体が非常に多い。粘土貸し出し件数は増えているものの、教材貸し出し利用や指導者講習会の参加を配布資料や広報活動で推進する必要がある。鑑賞系プログラムは今年度も学校団体からの申し込みが安定している傾向にあるが、リピーターとなる学校は少ない。プログラムの進行が可能な実技室スタッフを一人でも多く養成するとともに各プログラムの内容をバリエーション展開するなど今後に向けた見直しが必要である。	【成果】 ・平成27年度から運用する貸し出し教材であるアートカードの試験運用とPRを重ねたことで実技室との連携が少なかった大学をはじめとする県内の各学校団体と広く交流を行うことができた。 ・外部講師を招いて行う実技系の講座「実技講座」、「わくわくアトリエ」では展示作品について、講師による技法の説明や作品解説を取り入れた鑑賞を全ての講座で実施した。 ・粘土貸し出しをはじめとする教材貸し出し件数が増加した。実技室のプログラムに頼りきりではなく、教材利用による自主的な活動を行う学校団体が増えたためである。 【課題】 ・プログラムのより一層の質的向上を目指し、年間各プログラム内容、実施回数の見直しを図る。 ・市内の各学校団体と年間複数回、継続して連携を行う。
	16 鑑賞系プログラム数	18 件	36 件		
	17 コレクションを活用したプログラム数	18 件	36 件		
	18 普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート【定性】	—	特記事項		
2 静岡県立美術館の活動をアピールする普及事業を開催します	19 講演会等の開催件数	160 回	164 回	ロダン館20周年事業として、パリ・ロダン美術館館長を招聘し講演会及び国際シンポジウムを開催した。	【成果】 ・ロダン館20周年を記念して特別講演会及び国際シンポジウムを開催、ロダン美術館館長の講演と共に国内研究者による最新の知見も発表され、来場者に質の高い充実した内容を提供した。ロダン館を擁する美術館としての存在感を示すことができ、また今後のパリ・ロダン館との連携の上でも有益であった。 ・トークショー、トークイベントなど、講演形式だけでなく多様な形態で講座を行い、来館者に好評を得た。 【課題】 ・20周年記念という過性の事業にとどまることのないよう、引き続き多彩な形式による講座や講演会のあり方を検討・試行する。 ・聴講者確保のためにさらなる広報に努める。
	20 学芸員のフロアレクチャー等の数	120 回	97 回		
3 地域住民、企業、友の会、ボランティア等との連携を深化させ、美術館を核とした地域づくりに努めます	21 地域住民等と連携した取り組み数	6 件	26 件	・地域住民と連携した取り組みに関しては【定性】レポートのとおり ・館内空間を生かした催事については、本館エントランスを使用した「ちょこっと体験」、「ドット若冲」の展示、「めぐりアート」の展示、ロダン館ギャラリートークを実施した。 また、ロダン館20周年記念事業では、地獄の門前を式典会場とし、コンサートやダンスなどのアトラクションを行い参列者からの評価を得た。	【成果】 地域住民等と連携した取り組み ・「下岡蓮杖展」、「石田徹也展」では、作家の出身地(下田市、焼津市)の市役所、商工会議所、教育委員会と連携し、市広報紙、会報紙への広報、小中学校への広報など、地域に密着した広報が出来た。 ・草薙商店会主催「くさなぎフェス」に参加し、粘土等の体験教室を開催し好評を得た。 ・ロダン館20周年記念事業を契機に「ロダン・ウィーク」を設置し、地域や大学などと連携した雑貨&グルメのマルシェ、コンサート、ダンス、似顔絵広場、お茶会などを開催し、新たな広報を試みた。 【課題】 地域住民等と連携した取り組み ・地元作家の作品展示を美術館を活用して開催する「めぐりアート」や「ロダン・ウィーク」イベントなどの定着化を図り、地域との連携を深化させる。 ・作者の地元や美術館周辺地域など地域全般のみでなく、住民個別に強力なPRができるような方策を検討する必要がある。 ・有度山フレンドシップ協定では、各施設を結ぶ観光ルートを確立しパンフレット化する、料金設定を割引するなど、観光者に分かりやすく興味を持ってもらえるPR方法を策定する必要がある。 館内空間を生かした催事 ・ロダン館内部空間を利用した催事では、他の観覧客が観覧制限を受けたり、普段生じない騒音が発生したりするため苦情が発生するケースがある。催事と観覧客の調整が重要課題となる。
	22 館内空間を生かした催事の件数・参加者数	90 件 5000 人	59 件 10951 人		
	23 地域住民等と連携した取組に関する職員レポート【定性】	—	別添		

基本方針 C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

計画(P)			実施状況(D) H27.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 県民が「静岡県の誇りと自慢できる美術館」を目指し、様々な戦略的広報を発信していきます	24 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合	70.0 %	73.0 %		<p>【成果】</p> <p>・美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)は、前年度と比べ3%増加した。ホームページについては、満足度(%)は、わずかながら減少したが、アクセス件数が、前年度と比べ、約700,000件も減少した。従来からの課題であった若年層の開拓に向けたSNSの導入については、7月から、Facebookを新たに開始し、オンライン上の新たなコミュニケーションツールとして活用している。</p> <p>【課題】</p> <p>・ホームページは、平成21年度にリニューアルしてから、高めで安定しており、特に、25年度は、977,000件と、飛躍的に伸びていた。7からはFacebookも導入したところであるが、26年度にアクセス数が大幅に減少したことについては、今後さらなる分析を要する。</p>
	25 ホームページのアクセス件数	600,000 件	243,000 件		
	26 ホームページの満足度	75.0 %	72.5 %		
2 観光業界等と連携した新たな広報手段を開拓し、県立美術館の魅力を積極的に広報します	27 観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数	5 件	9 件	<p>・観光業界や他のイベントとの広報連携の取り組み 「ふじのくに観光大商談会」への参加 「ベースボールクリスマスIN静岡」への参加 「つながるくさなぎフェス」夏・冬 への参加 「草薙マルシェ実行委員会主催のマルシェ」誘致 「下田商工会議所主催の「運びいプロジェクト」と協働 「JR東海アート&トレイン」への参加 「日本平ホテルと観覧券付き宿泊パック」販売 「日本平動物園と共通割引チケット」販売 「静岡大学主催の「めぐりアート」」への参加</p> <p>・広報手法における新たな取り組み状況については【定性】レポートのとおり</p>	<p>【成果】</p> <p>観光業界や他のイベントとの広報連携の取り組み ・有度山フレンドシップ協定施設で協働し、静岡県大型観光キャンペーン推進協議会が主催する「ふじのくに観光大商談会」に参加し年間3回、トータルで100を超える観光業者にPRすることが出来た。実際に商談を行った旅行代理店から団体観覧の申込みがあった。</p> <p>広報手法における新たな取り組み状況について ・新たな取り組みとしてフェイスブックを開設し、常に新鮮な情報をアップした。これにより情報が拡散し県中部地区以外の県民やさらには県外、海外の住民にも情報が届けられ、今後の集客に繋がると考える。また、日本平動物園との割引共通チケット販売や動物園内に樹花鳥獣図屏風のレプリカ展示、動物園のペンギンに「若冲くん」と命名するなど他施設との協働による新たな取り組みを実施した。</p> <p>【課題】</p> <p>観光業界や他のイベントとの広報連携の取り組み ・有度山フレンドシップ施設で参加した「ふじのくに観光大商談会」では、各施設を巡る観光ルートを複数提案しパンフレット等で「見える化」しなければ、観光業界へのアピールが薄く、との指摘を業界から受けており、当方も同様の感触を感じていたところであった。このため、フレンドシップ協定施設で協働し観光ルートの開発を始めている。</p> <p>広報手法における新たな取り組み状況について ・フェイスブックの開設により情報の拡散を図っているが、広報ツールが観覧者数増加に繋がることの検証が必要である。</p>
	28 広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	-	別添		
3 ロダン館、富士山絵画を「静岡県立美術館の顔」としてその魅力を発信していきます	29 ロダン館の入場者数	80,000 人	51,938 人	<p>平成26年10月30日(木)、31日(金)に、フランス国立ロダン美術館カトリーヌ・シュヴィヨ館長をお招きし、平成26年3月に開館したロダン館の、20周年記念事業を開催した。</p> <p>平成29年度にロダン没後100年を迎えるにあたり、ロダン作品32体を擁し、国内唯一の常設展示を行う美術館として、近代彫刻史に加え、彫刻史以外の観点やロダンと他の美術家とのかかわりなど、様々な視点を組み合わせ、偉大な彫刻家ロダンの姿をより豊かに浮き彫りにするとともに、ロダン館を活性化させるキックオフ事業として開催した。</p>	<p>【成果】</p> <p>ロダン館内の「地獄の門」前にて、荘厳な雰囲気の中、三重奏や創作ダンスの披露を織り込んだ開会式典を実施し、参列者から高評価を得たほか、フランスから招聘した国立ロダン美術館館長も話題となり多くのメディアに取り上げられた。また、地域と協働した初めての試みである「マルシェ」を正面玄関前モニュメント広場で開催し、3,000人を超える集客が出来た。これまで美術館には来たことが無かったという客も見受けられ、新たな観覧者の発掘につながった。</p> <p>【課題】</p> <p>ロダン館を利用した催事を行うにあたり、催事に直接関係のない観覧者は、観覧制限を受けたり騒音を感じたりするため、ご理解を得るための調整が重要である。</p> <p>また、ロダン館は音響に十分配慮した設備を有しているものではないため、催事の際の計画が重要となる。</p>

基本方針	D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます
------	------------------------------

計画(P)			実施状況(D) H27.3.31現在		評価(C)
重点目標	評価指標	目標	実績	特記事項	自己評価
1 お客様の満足度を高める施設を目指し、環境整備に努め、利便性を高めます	30 美術館利用者数	250,000 人	237,463 人	・ロダン館照明をLEDに更新し、鑑賞環境を改善した。 ・建築及び各設備の大規模改修(リニューアル)計画の具体化に向けて、美術館職員の内部検討会を設置し、活動を開始した。 ・図書閲覧室は施設管理上の理由から利用を中止した。	【成果】 ・レストラン・カフェの満足度は70.4%で目標(70.0%)を達成した。特にレストランにおいては、企画展に合わせて特別料理(ミュージアムシェフ)を提供するなど、質の高いサービスを提供し、お客様の好評を得ている。 ・ミュージアムショップの満足度は87.2%で目標(85.0%)を上回った。特に企画展に合わせた商品のレイアウトの工夫(美少女展でのフィギュア、石田展での模型など)を行い、お客様の満足度向上に努めた。 ・当館への利用交通機関で最も多いのは自家用車であり、アクセス満足度は84.2%と目標の80%を上回った。特に来館者の多いイベント(ロダンウィーク)の際には、隣接する県立大学の職員駐車場を借用し、交通渋滞を起こさないように誘導するなどの対応を行った。 ・ホームページに「団体のお客様・引率の方へ」をアップし、バス駐車場の案内等のアクセス情報を追加し、利便性向上に努めた。 ・ロダン館の照明をLEDに更新し、鑑賞環境を改善したほか、必要な改修工事等を実施し、良好な施設・設備の維持管理に努めた。 【課題】 ・当館は開館から約29年が経過し、経年劣化等により建築及び各設備に多くの不具合が生じている。このため中長期的には建築及び各設備の大規模改修(リニューアル)計画の具体化に向けて検討を進める必要がある。短期的には平成26年度に実施した劣化診断結果等をもとに、リニューアル計画の検討状況を踏まえつつ、緊急度の高い施設・設備の修繕等を計画的に実施する。 ・公共交通機関で来館した方のアクセス満足度は74.6%で目標(80.0%)を下回った。お客様からのアクセスに関する問合せに対して、「JR草薙駅から運行する100円バスを利用するのが便利であること」を引き続き周知しているものの、来館者の多い日曜、祝日の運行が30分間隔(平日・土曜は20分間隔)であることが影響していると考えられる。今後はバス会社への増便等の要請を含め対策を検討する。 ・図書閲覧室は施設管理上の理由により、年度途中(平成26年8月27日)から利用を中止しているため、早急に修繕工事を実施し、お客様が利用できるようにする必要がある。
	◆展覧会観覧者数	140,000 人	94,664 人		
	◆移動美術展	10,000 人	2,122 人		
	◆教育普及プログラム参加者数	- 人	30,502 人		
	◆ミュージアムコンサート入場者数	- 人	242 人		
	◆県民ギャラリー入場者数	- 人	41,201 人		
	◆講堂入場者数	- 人	8,646 人		
	◆レストラン・カフェ利用者数	- 人	38,725 人		
	◆ミュージアムショップ利用者数	- 人	20,538 人		
	◆図書閲覧室利用者数	- 人	823 人		
	31 来館者のアクセス満足度 ※上段:公共交通機関利用 下段:自家用車利用	80 %	74.6 % 84.2 %		
	32 レストラン・カフェに対する満足度	70.0 %	70.4 %		
	33 ミュージアムショップに対する満足度	85.0 %	87.2 %		
2 施設再始動検討を始め、より県民に愛される美術館を目指します	34 鑑賞環境に対する満足度(%)	90.0 %	92.8 %	上記参照	【成果】 上記参照 【課題】 上記参照
	3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)※再掲	88.0 %	87.2 %		
	21 地域住民等と連携した取り組み数(件)※再掲	6 件	件		
	30 美術館利用者数(人)※再掲	250,000 人	237,463 人		
	32 レストラン・カフェに対する満足度(%)※再掲	70.0 %	70.4 %		
	33 ミュージアムショップに対する満足度(%)※再掲	80.0 %	87.2 %		

展覧会に関する自己点検評価表（平成 26 年度）

- 1 「大阪新美術館コレクション 佐伯祐三とパリ ―ポスターのある街角」展
- 2 「没後百年 日本写真の開拓者 下岡蓮杖」展
- 3 「アニマルワールド ―美術のなかのどうぶつたち」展
- 4 「美少女の美術史」展
- 5 「静岡県立美術館コレクション展 風景解剖学 ―古今東西、風景画のしくみ」展
- 6 「石田徹也展 ―ノート、夢するし」展

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「大阪新美術館コレクション 佐伯祐三とパリ -ポスターのある街角」展
------	---------------------------------------

期 間	4月4日(金)～5月25日(日) (46日間)
-----	-------------------------

場 所	静岡県立美術館第1～6展示室
-----	----------------

担当者名	三谷理華
------	------

学芸員の企画への参加の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>
マスコミ等による共催の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>	巡回の有無	有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>

記入日	企画	2014年4月10日(木)
	実績	2014年7月15日(火)

企画		実績・検証	
目的・内容	1920年代のパリに焦がれ、かの地で短くも情熱に満ちた生涯を閉じた洋画家、佐伯祐三(1898-1928)の画業を回顧する展覧会。日本近代洋画の中でも一際強烈な個性を放つその画業を、質量ともに比類のないコレクションである大阪新美術館建設準備室所蔵の佐伯作品58点により紹介する。また、関連作家の作品や同時代のフランスのポスター作品等約50点を併せて展示し、画家が魅せられた芸術の都の趣きを伝える。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	鮮烈な画風と波乱に満ちた短い生涯にまつわる逸話により、日本では根強い人気を誇る佐伯祐三の作品を初期から晩年までまとめて展覧し、幅広い美術ファンの関心に応える。加えて、佐伯の生きた時代のパリをテーマとした関連作品を展示することで、画家佐伯祐三の作品世界や文化的背景に関するより深い理解を促す。想定される鑑賞者層としては、県内在住の中高年齢層ならびに美術を愛好する首都圏、名古屋都市圏の中高年齢層、および県内の若年層。	【アンケートにみる特徴】	
指標(数値目標)	観覧者数 35,000人	観覧者数 18,923人	
収支計画	・歳出 8,806千円 ・歳入 11,589千円 ・特財率 131.6%	・歳出 8,087千円 ・歳入 6,320千円 ・特財率 78.2%	
広報戦略 主な取組	・展覧会開会の1ヶ月前に、展覧会プレ企画イベントを開催し、展覧会のPR、開幕への盛り上げを図った。 ・また、静岡第一テレビでのテレビCM放送や番組内での告知、テレビ局主催イベント等でのチラシ配布を行うとともに、読売新聞での連載記事掲載により、主に県内在住者に対し展覧会PRを実施。 ・その他、首都圏、名古屋圏での新聞・雑誌等広告掲載によるPRを実施。	・展覧会プレ企画イベントは、静岡日仏協会の協力もあり、50名程度の定員が一杯となるなど盛況であった。だが、大半が協会の呼びかけに応じたフランス文化愛好者であり、来聴者層のすそ野は広いと言えなかった。より効果的な広報のあり方が今後の課題である。 ・静岡第一テレビの番組内告知やCM放送は、会期中は精力的に行われたが、会期前の事前告知は少々滑り出しが遅かったかと思われる。この点、今後の検討を要する。 ・また、年度の変わり目で広報課への展覧会情報の提供(SDO「情報ひろば」DBへの情報入力)が遅れたため、広報課所管のラジオ番組枠を利用した広報が実施できなかった。この点も、今後改善の必要がある。	
自己評価 今後の課題	・展覧会自体はオーソドックスな洋画展示がメインであり、かねてより洋画を愛好する観客層と思われるお客さまからは、好意的な反応をいただくことが多かった。今後は、よりすそ野の広い観客層にもアピールするためにはどのような工夫が必要か、試行錯誤を重ねることが肝要と思われる。 ・展覧会プレ企画イベントや美術講座のテーマは、展覧会そのものではなく佐伯祐三の時代の文化をテーマとしたところ、来聴者から予想外に好意的な反応をいただいた。展覧会に関連しつつもより視点を広くとったテーマの講座に対するニーズを認識するとともに、今後もこのような講演・講座も随時開催を心がける必要があると思われた。 ・オーディオン演奏による無料のロビーコンサートを実施したところ、大変好評で、この日の入場者数が会期中最も多い結果となった。この種のイベントの効果が再認識された。 ・上述したが、展覧会の広報開始時期や広報課が所管する広報枠を利用した広報など、遺漏がないよう留意していく必要がある。		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「没後百年 日本写真の開拓者 下岡蓮杖」展
------	-----------------------

期 間	6月10日(火)～7月21日(月・祝) (37日間)
-----	----------------------------

場 所	静岡県立美術館第1～6展示室
-----	----------------

担当者名	南美幸
------	-----

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input type="radio"/> 有 <input checked="" type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2014年4月14日(月)
	実績	2014年11月26日(水)

企画		実績・検証	
目的・内容	日本写真史上開祖の一人といわれる、下田生まれの下岡蓮杖(1823～1916)の回顧展。静岡ゆかりの作家を扱うとともに、当館ではほぼ初となる本格的な写真展である。東京都写真美術館との共同企画展。写真史として知られる蓮杖だが、元は狩野派絵師であったため、本展では写真のみならず、絵画や工芸品も併せて展示することにより、その創作活動を総合的に振り返る。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 ・今回の280点に及ぶ展示は、没後百年の蓮杖の写真師の生き方が理解でき、その展示方法の工夫、苦心には心打たれるものがある。写真というものの発生・展開を考えることのできるよい企画であり、それも本県出身であるので、何年後かに再度視野を変えた写真展を構想してほしい。 ・下田出身で静岡県ゆかりの下岡蓮杖の大変充実した展覧会で、静岡県立美術館で開催されることに大きな意義があった。近年、写真も美術の範疇に入れられるようになったが、幕末明治初期においては書画との関係が深いので、写真のみを取り上げるのではなく、絵画や版画などをともに展示した今回の展覧会は、蓮杖その人についても、また幕末明治という時代についてもわかりやすい構成となっていた。	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	日本の初期写真史上、重要な位置を占める蓮杖だが、未だに謎の部分が多い。本展は、蓮杖の年譜に沿って、その生涯及び業績の変遷を辿ることによって、日本初期写真史における蓮杖の位置づけを明確にする。またその作品の展示により、日本の初期写真の一側面を紹介することになる。 写真の愛好家にはどちらかというと男性が多いと予想される。また、本展は東京都と当館の2会場巡回であるため、他県からの写真ファンの来館を期待したい。	【アンケートにみる特徴】	
指標(数値目標)	観覧者数 12,000人	観覧者数 5,269人	
収支計画	・歳出 11,692千円 ・歳入 6,698千円 ・特財率 42.7%	・歳出 10,793千円 ・歳入 4,375千円 ・特財率 40.5%	
広報戦略 主な取組	ご協力いただいている下田商工会議所との提携により、静岡県東部からの来館者を呼び込む。写真にフォーカスした展覧会であるため、美術以外のファン層を惹きつける手法について検討中である。また、邦楽コンサート、講演会やレクチャーおよび実技双方の講座等の展覧会関連のイベント実施により、従来の美術ファンの来館にも対応する。	・下田市商工会議所と連携し、同広報誌やHPを通じて本展PRにご協力いただき、併せて当館では下田市観光ブースを設置するなど、県内自治体との新たな取り組みを行なった。 ・写真愛好家のグループ(全日本写真連盟静岡支部、静岡県写真館協会)にチラシ・ポスター等を送付し、ターゲットを絞った広報を行なった。 ・邦楽コンサートの実施。	
自己評価 今後の課題	・本展は、静岡ゆかりの作家を取り上げ、当館ではほぼ初となる本格的な写真展であると同時に、東京都写真美術館との初めての共同企画という点から、美術史的かつ他館とのネットワークの形成という観点からは、開催の意義はあったと思われる。 ・観覧者数・歳入・特財率の数字から見ると、目標を下回った。この課題としては、いつも挙げられることだが、会期前・会期中の広報戦略の検討不足が考えられる。美術史的な意義等はあるとは言え、目標数字への接近を図るには、まず年間を通じて全体の計画を立て、さらに一つの展覧会ごとに細密な広報計画を練る必要がある。 ・本展は当館での写真展開催の幕開けとなった。アンケートを実施していないため、新規観覧者の割合は不明だが、研究活動評価委員会からのご意見にもあるように、今後も継続して写真展を行なうことで、美術ファンのみならず写真ファンの開拓を行なう必要があると思われる。		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「アニマルワールド - 美術のなかのどうぶつたち」展
------	----------------------------

期 間	7月29日(火)～9月7日(日) (37日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	福士雄也
------	------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2014年4月2日(水)
	実績	2014年12月10日(水)

企 画		実 績・検 証	
目的・内容	古来、美術の世界では様々な形で動物たちが表現されてきた。ときに愛らしく、ときに優美なその姿は、単に美しいものや身近な存在に対する愛着心ばかりでなく、出世や子孫繁栄といった種々の現実的な願いが投影されたものでもあり、その意味では人間の実生活と密接に関わっているということが出来る。 本展では、当館所蔵・寄託作品を中心に、動物を描いた絵画を集めて展示する。動物園でおなじみの人気者から想像上の生き物まで、人間が動物たちに向けたまなざしと、そこに込められた意味を考える。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 ・風景画の多い県立美術館で動物画を取り上げ、その絵画としての奥深さ、魅力を知らしめたところ、子供たちにも喜ばれたことであろう。／県立美術館の図録は、学問的な水準を保ちつつ多くの人々の楽しめるわかりやすいものであってほしい。そのことを多くの点で実現していると思われる。(金原委員) ・新出作品が少なからず含まれるなど、総じて充実した展示であった。学芸員の日常的調査があったからであろう。(榊原委員)	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	・動物という親しみやすいテーマを設定することで、従来の美術ファンだけでなく、幅広い層の集客が見込める。特に、夏休み中の小中学生およびその保護者の来館を促したい。 ・「なぜ動物は表現されてきたのか」という視点を導入することで、観る喜びに知る愉しみを加え、深みのある芸術鑑賞の機会とする。 ・フレンドシップ協定を結んだ日本平動物園との連携の機会とする。 ・主なターゲットは、小中学生およびその保護者、県内居住の中高年齢層。	【アンケートにみる特徴】 ・12歳以下の鑑賞者の割合が4.2%であり、25年度1.6%、24年度1.3%(いずれも平均値)の過去実績と比較して高い数値を得た。40歳代の鑑賞者の割合も25.1%と高い(25年度15.2%、24年度15.5%)のは、その保護者層と考えられる。 ・来館のきっかけの上位は、「インターネットを見て」20.7%、「家族に誘われて・勧められて」18.4%、「ポスターを見て」16.7%となった。ターゲットの年齢層に応じてインターネットが活用されたこと、また依然としてポスターも有用であることが分かる。 ・全体的な満足度は95.7%と高い数値を示す。ほか「心地よく鑑賞」94.5%、「スタッフの対応の適切さ」85.6%、「来館を勧めたいか」75.9%といずれも高い数値を示した。	
指標(数値目標)	観覧者数 17,000人 作品やテーマに興味を持った人の割合 80.0%	観覧者数 18,065人 作品やテーマに興味を持った人の割合 88.9%	
収支計画	・歳出 11,116千円 ・歳入 7,755千円 ・特財率 69.8%	・歳出 8,222千円 ・歳入 10,268千円 ・特財率 124.9%	
広報戦略 主な取組	・日本平動物園と連携して、鑑賞へとつながる有意義かつ魅力的なイベント等を実施し、鑑賞者の満足度を高める。また、これによって広報効果を高めることもねらいとする。 ・新出作品の提示等、学術的意義についても早い段階から情報発信を行っていく。	・新出作品の公開等、展示内容に関する話題性が高く、NHK日曜美術館アートシーン、AERA、新聞各紙といった全国的な情報発信につながった。 ・日本平動物園との連携では共通チケットの販売も好評であり効果があった。 ・日本平ホテルとの連携企画として、展覧会鑑賞をセットにした宿泊プランを設定できたことは、広報的な効果もあったと思われる。	
自己評価 今後の課題	・夏休み期間中の企画として、小中学生およびその保護者の来館を促すという当初の目標は、おおむね達成できたと思われる。 ・予想以上の来館者数を得ることができた点は、早期からの情報発信や、日本平動物園・日本平ホテル等との連携が功を奏したものと考えている。今後もこうした連携を深めていくことが重要だろう。 ・ポスターデザインは非常に満足のいくものであり、それが来館者増に繋がっていることがアンケート結果からもうかがえる。デザイナーについての情報は、今後も継続的に収集していく必要がある。 ・個々の展示作品については、もう少し幅の広さやバランスを考慮したり、全体の中での位置を明確にすべきものもあった。 ・会期最終週に図録が完売となったことは、来館者サービスという点で大きな課題を残した。結果論ではあるが、もう少し余裕をもった製作部数の設定が必要であったかもしれない。		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「美少女の美術史」展
------	------------

期間	9月20日(土)～11月16日(日) (50日間)
----	---------------------------

場所	静岡県立美術館第1～6展示室
----	----------------

担当者名	村上敬
------	-----

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2014年4月5日(土)
	実績	2014年12月4日(木)

企画		実績・検証	
目的・内容	世界の注目を集める日本の漫画やアニメの中で「美少女」は突出したモチーフである。 もっともこれは現代に固有の現象ではなく、「少女」という存在は古くから日本の視覚文化において重要な役割を果たしてきた。 美術、文学、漫画、アニメ、フィギュアなど様々な領域を横断しながら、過去と現在の日本の視覚文化を考察することを主たる狙いとする。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 (坂本委員)アートのなかの少女像の調査はこれまで多くはなく、その点で興味深い。また、「芸術」の枠外の部分の調査は今後の館の仕事となる。その意味で意義がある。少女歌劇や吉屋信子など舞台・文芸等への展開も考えられる。 (山梨委員)ジャパン・クールが国際的に注目される現状を踏まえて、少女の中でも「美的観点から高い評価を得ている「美少女」に美術館が取り組んだことを評価したい。静岡県立美術館が狭義の「美術」展覧会としても本格的なものを次々と行う一方で、サブカルチャーをも入れた広義の「美術」をも視野に入れ、現代の視覚を問う場となっていることを高く評価する。	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	・展覧会の狙い 「アニメや漫画の素材を単に並べるだけ」の展覧会とは差別化を図る。 歴史的に回顧された少女モチーフとの共通点や相違点を探ることで、現代日本文化について考えるきっかけとする。 ・主なターゲット 男性と県外来館者および学生・若年層が多くなることが想定される。当館来館者数に占める割合が比較的低いこの層に美術のおもしろさを伝えることを目指す。	【アンケートにみる特徴】 ■狙いについて 過去に類例の少ない展示ではあったが、自由記入欄を見る限りクレームも少なく、展覧会の狙いはおおむね浸透したと考えられる。広報については情報発信不足を指摘するコメントが複数あり。 ■ターゲットについて * ()内はH24,25年度の全体平均値 ・男女比が「女性64:36男性」という割合になり、当初予想していた以上に女性の割合が高かった。(H24/60:40、H25/55.5:44.5) ・県外来館者比率は16.5%。少なくはないが特別に多いという水準でもない。(H24/10.5%、H25/19.1%) ・いっぽう、20歳代以下の割合は50.0%と極めて高率であった。(H24/24.8%、H25/24.8%) ・来館のきっかけにポスターを挙げた回答者が31.2%(H24/16.2%、H25/14.3%)と比較的高率であった。	
指標(数値目標)	観覧者数 15,000人 作品やテーマに興味を持った人の割合 80.0%	観覧者数 21,147人 作品やテーマに興味を持った人の割合 86.6%	
収支計画	・歳出 15,818千円 ・歳入 8,648千円 ・特財率 54.7%	・歳出 14,014千円 ・歳入 14,458千円 ・特財率 103.2%	
広報戦略 主な取組	・県中部に強い地元マスコミ(静岡新聞・SBS)との広報協力により、同地区での露出を増やし、観覧者のベースを固める。 ・本展は素材がキャッチーであり、イベント向きでもある。昨年度(実行委員会予算)よりホビー見本市(ワンダーフェスティバル)でのチラシ配布などをおこなってきたが、引き続きイベント等での広報露出を目指す。	・巡回3館共通の素材作成により、SBSテレビスポットCMを流すことができた。 ・巡回協力企業によるミュージアムグッズ(オリジナルフィギュア)の紹介にちなみ、模型雑誌『モデルグラフィックス』に展覧会情報を露出することができた。	
自己評価 今後の課題	■自己評価 ・アンケートの自由意見を見る限り、展覧会の狙いについてはおおむね浸透したと考えられる。 ・会期中、全国紙の美術欄(朝日新聞・公明新聞:いずれも10月15日)に展評が掲載された。展覧会の内容についても洞察の行き届いた高い評価を受けた。 ・美術館連絡協議会より美連協奨励賞をうけた。内容に対する一定の評価と受け止めたい。 ・若年層の誘因には予想以上に成功した。 ■今後の課題 ・女性の来館者が予想外に多く、広報対象も女性を中心にした方がより効率的だったかもしれない。 ・来館のきっかけに新聞・テレビを挙げた層はあまり多くない。若年層の来館者が多かったことと関係する可能性もあり、今後の展覧会における広報メディアの選択には検討を要する。(新聞購読率の高いシニア層に対してシニア層をターゲットにした展覧会の新聞広報をあてる、など)		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「静岡県立美術館コレクション展 風景解剖学 —古今東西、風景画のしくみ」展
------	--

期 間	11月26日(水)～1月4日(日) (32日間)
場 所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	浦澤倫太郎
------	-------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input type="radio"/> 有 <input checked="" type="radio"/> 無	巡回の有無	<input type="radio"/> 有 <input checked="" type="radio"/> 無

記入日	企画	2014年4月15日(火)
	実績	2015年2月27日(金)

企 画		実 績・検 証	
目的・内容	当館の風景画コレクションの幅広さを十分に生かし、特に風景表現を構成する様々なパーツに注目することで、風景画のしくみ、成り立ち、意味などを鑑賞者に考えてもらってきっかけとしたい。 時代や地域を横断して展示することで、好奇心を掻き立てるような鑑賞体験を提供するとともに、作品の特徴を端的に紹介する。 またセルフガイド等を作成し、主に若年層に対して美術への興味を喚起する。	【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 ・風景をパーツに分ける試みは面白い。 ・コレクションの幅に広さを活かしたものであったと言える。 ・コレクションの質の高さを改めて示すことが出来た。 ・より踏み込んだテーマ設定や解説があってもよかったのではないかと。	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	・ねらい 風景表現のパーツに注目することで、普遍的な要素と作品個別の味わいとを、それぞれご堪能頂く。 また時代・地域を横断した作品の比較を目指すことで、静岡県立美術館ならではの体験を提供し、当館コレクションの意義、価値を、来館者の方々と共有する。 鑑賞教育の場として利用してもらい、子供たちにとって美術作品を鑑賞する糸口ともしたい。 ・主なターゲット 学生、若年層 美術鑑賞の入門と位置づけ、若年層の取り込みを図る。 中高年を中心とした美術ファン 様々な時代、地域の名品を出す点をアピール。	【アンケートにみる特徴】 ・来館者の内訳は市内に居住し、これまでも当館に訪れたことのある方が中心であった。 ・若年層の取り込みという点には大きな課題が残った。 ・図録が欲しいという声がいづつか聞かれた。実際、展覧会の成果を形に残しておくことも必要であると感じられた。	
指標(数値目標)	観覧者数 11,000人 作品やテーマに興味を持った人の割合 80%	観覧者数 6,817人 作品やテーマに興味を持った人の割合 85%	
収支計画	・歳出 5,753千円 ・歳入 2,378千円 ・特財率 41.3%	・歳出 3,651千円 ・歳入 1,230千円 ・特財率 33.7%	
広報戦略 主な取組	・池大雅《龍山勝会・蘭亭曲水》(重要文化財)やシニャック、ターナーなど著名な作品を中心に広報を行う。 ・若年層や小学校など各教育機関にアピールする。	・チラシなどには名品を中心に画像を掲載した。それらに対する事前の問い合わせは少なからずあった。 ・協賛・タイアップなどが無い中で、広報には大きな課題があったが、一方で新聞・雑誌記事などに取り上げてもらうことが出来た。 ・正月に行った企画はおおむね好評であった。	
自己評価 今後の課題	当館の作品収集の柱でもある風景画をいかに新しく見せるか、というところに重点を置いて企画した。風景表現を構成する各「パーツ」に注目し、それらをテーマとして設定することで、東西の作品を比較展示することができた。しかし「パーツ」はあくまでも作品の一部分にすぎないため、作品の表面的な部分にのみ注目されてしまう、あるいは恣意的な解釈を提示するにとどまるおそれもあった。その一方で今回のテーマ設定だからこそ出品できた作品もあり、これまでめったに展示する機会のない作品もあった。出品頻度の高い名品ばかりでなく、マイナーな作品にも光を当てることが出来たという点も、コレクションの活用という目標に当たっていると思われる。 風景画という比較のおとなしいジャンルを、いかに魅力的に仕立てあげるかという課題が当初からあり、そして根本的な解決策を見出すことが出来なかった。展示のなかでは、コレクションの魅力のある程度伝えることが出来たが、それを外部に効果的に発信していくには更なる工夫が必要と思われる。またタイトルが難しいという声もあった。風景画をコレクションの中核とする当館にとっては今後もついて回ることであるので、より共感しやすい演出を心掛けたい。 お汁粉の振る舞いははじめとした正月の企画は、想像以上に好評をいただいた。費用対効果という面での課題も残るが、地域に密着した企画は今後も続けていきたい。		

(様式1)

展覧会自己点検評価表

展覧会名	「石田徹也展 ノート、夢のしるし」展
------	--------------------

期間	1月24日(土)～3月25日(日) (52日間)
----	--------------------------

場所	静岡県立美術館第1～6展示室
----	----------------

担当者名	川谷(学芸課)、横畑(総務課)
------	-----------------

学芸員の企画への参加の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無
マスコミ等による共催の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無	巡回の有無	<input checked="" type="radio"/> 有 <input type="radio"/> 無

記入日	企画	2014年4月15日(火)
	実績	2014年 3月31日(火)

企画		実績・検証	
目的・内容	<p>1973年静岡県焼津市に生まれた石田徹也は、社会に渦巻く不安に目を向け、時に辛辣に、時にユーモラスに描き続けた。気鋭の画家として徐々に注目を集め始めた矢先、2005年に踏切事故により31歳の若さでその生涯を閉じる。没後、遺作展の開催や遺作集が刊行され、メディアでも取り上げられ、大きな社会的反響を呼んだ。</p> <p>本展では、静岡県立美術館が所蔵する21点を含む石田徹也の代表作約110点を核に、石田が残した51冊ものスケッチブックに描かれた、下絵やアイデアを初公開する。また石田の言葉を随所に紹介し、制作の過程や思考の跡をたどる。</p>	<p>【研究活動評価委員会からの意見(要約)】 (金原宏行委員)代表作100余点とスケッチブック、アイデアノートが公開され、制作プロセス、思考の跡をたどりやすくしているところに、展覧会の独自性がある。県立美術館の作品収蔵が遺族からの寄贈作品によっているため、出品作に完成度の高いものが多数を占める。そのため重要な作品が網羅され、部立ても新鮮で充実している。(潮江宏三委員)文字通りコンテンポラリーな時代を生きた画家の本格的な紹介であり、その先駆性は言うまでもない。その代表作を静岡県立美術館が所蔵しているだけでなく、ノート類等の資料に関しても十分な調査が行われており、今回の展覧会は、それらを駆使した決定版という言うべき展覧会になっている。作家のインパクトは言うまでもなく、細部まで丁寧に組み立てられた充実した展覧会となっている。自館のコレクションの意義を問い直し、価値づけしているという意味でも、重要な展覧会企画となったと思う。</p>	
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	<p>石田が遺したスケッチブックや下絵、言葉などを初公開し、本画との並列展示を行う。混沌とした時代と諧謔的に向き合い続けた石田の、制作の過程や思考の跡をたどり、そのまなざしの先にあるメッセージを読み解く。</p> <p>本展に合わせて、求龍堂より、本画とそのアイデアスケッチ、合計416点が掲載された、336ページの公式図録兼書籍が刊行され、NHK日曜美術館本編でも取り上げられるなど(2013年9月29日放映)、改めて石田徹也に注目する機運が高まっている。主なターゲットは、10代～40代の男女。静岡県内全域、東海エリア。</p>	<p>【アンケートにみる特徴】</p>	
指標(数値目標)	観覧者数 20,000人	観覧者数 15,913人	
収支計画	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 9,663千円 ・歳入 9,300千円 ・特財率 96.2% 	<ul style="list-style-type: none"> ・歳出 8,870千円(見込) ・歳入 9,561千円 ・特財率 107.8%(見込) 	
広報戦略 主な取組	作家が焼津市出身という事から、地域にターゲットを絞り、出身校などにピンポイントで、告知を行う。若者への人気が高いことから、SNSを活用した広報展開を行う。	焼津市内に焦点を絞った広報。焼津市内の公立小学校3年生以上、公立中学校、作家の出身校である焼津中央高校生徒へのチラシ配布、1月25日発行の「むるぶ」内の「志太そこ知り物語」への記事掲載。代表作《飛べなくなった人》を模したしおりを作成し、市内書店、図書館計11か所に配布。facebookへのニュース、イベント情報の投稿。テレビ静岡でのテレビコマーシャルの放映。 雑誌『美術屋・百兵衛』特集記事への取材協力。	
自己評価 今後の課題	巡回館4館の学芸員が協同して調査をし、その成果を元に、スケッチ・ノート類と、絵画を並置してみせる展示を行った。研究の成果を収めた展覧会カタログは、美術館連絡協議会の優秀カタログ賞に選ばれるなど、内容面で、外部からの高い評価を得た。また、会期中設けられた、作家へのメッセージコーナーでは、200人を超える参加があり、中身の濃いメッセージが寄せられ、鑑賞者の内面での満足度をうかがい知ることができた。	<p>入場者数は、目標20,000人のところ、最終的に15,913人に留まった。序盤は予想を超えるペースの来場があったが、中盤から終盤にかけて、いまひとつ伸びなかった。観覧者数分析によると、一度観覧した人が、口コミ等で多くの友人等に勧めて、さらに観覧者数を伸ばすといった拡散が少なかったのではないかと推測される。一方、収支面では歳出を抑えたこと、有料観覧者数が多かったこと、図録の売り上げによる収入が伸びたことなどから、歳入が増え特財率は目標値を10%上回った。内容面での専門委員を含む外部からの高い評価、特財率の結果などから、コレクションを活用した展覧会として、良好な成果を上げたと考えてよいのではないだろうか。</p> <p>同展は、石田徹也没後10年の展覧会となったが、今後10年、20年が経過して、石田が描いた1990年代～2000年代半ばが歴史化されていくともなっており、作品の意味付けも変化していくだろう。作家の評価はまだ定まりきっていないことから、作品を21点所蔵する美術館として、引き続き作品の検証を進めるとともに、広く知られていく事に務める必要がある。</p>	

調査・研究に関する自己評価点検評価報告書(平成 26 年度)

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 1 日	
職・氏名	学芸部長・泉万里
●専門分野	日本中世・近世初期絵画史
●所属学会	美術史学会・家具道具室内史学会・芸能史研究会
●主要研究テーマ	中世絵画
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
・論文「田囃子・桂男・乗牛風流——月次祭礼図模本にみる中世の夏」(小泉和子編『新体系日本史』14 生活文化史 山川出版 平成 26 年 4 月)	
・論文「浜松図屏風(文化庁蔵)——海辺の四季絵」(『國華』1432 号、平成 27 年 2 月)	
	小計 2 本
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	
なし	
	小計 本
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
・作品紹介「三十六歌仙絵」(富士市立博物館編『六所家総合調査報告書 美術・書画』富士市教育委員会 平成 27 年 3 月)	
・作品紹介「絹本著色 江戸風景図」、「紙本金地著色 竹梅図・紙本著色 草虫図衝立」(鳥取県教育委員会編刊『鳥取県文化財調査報告書』第 20 集 平成 27 年 3 月)	
・分担執筆「第 6 章 桃山時代」(山下裕二・高岸輝監修『日本美術史』美術出版社 平成 26 年 4 月)	
	小計 3 本
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
なし	
	小計 本

合計 5 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 20 日

職・氏名 学芸課長・三谷理華

- 専門分野 美術史
- 所属学会 美術史学会、美学会、日仏美術学会、ジャポニスム学会、九州藝術学会、Société de l'histoire de l'art français、ICOM
- 主要研究テーマ ヨーロッパ近代美術史、日仏文化交流史

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

- 1 「ラファエル・コラン (1850-1916) —関連一次資料類にみる画家を取り巻く交友の諸相」『静岡県立美術館 紀要』第 30 号、平成 27 年 3 月

小計 1 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- 1 企画展「大阪新美術館コレクション 佐伯祐三とパリ」展 主担当
- 2 同展 フロアレクチャー 1 回
- 3 同展 特別講演会「佐伯祐三と 1920 年代のパリ」(講師：熊田司氏) 1 回
- 4 同展 美術講座「1920年代、パリの諸相—エコール・ド・パリ、アール・デコ、宝塚少女歌劇」 1 回
- 5 同展 まったりロビーコンサート「佐伯祐三が愛したパリの音楽」(アコーディオン演奏：カオリアアコーディオン氏) 2 回
- 6 同展 作品紹介新聞連載寄稿「佐伯祐三とパリ 上・中・下」(読売新聞) 3 回
- 7 企画展「美少女の美術史」展 副担当
- 8 企画展「石田徹也」展 副担当
- 9 企画展「ウィーン美術史美術館展」(準備) 主担当
- 10 収蔵品展「水辺のアート」展 主担当
- 11 同展 フロアレクチャー 1 回
- 12 収蔵品展「新収蔵品展」 フロアレクチャー 1 回
- 13 ロダン館開館 20 周年記念国際シンポジウム「オーギュスト・ロダン (1840-1917) —複合的視点でとらえる—」 主担当
- 14 同シンポジウム パネリスト
- 15 ロダン館開館 20 周年記念講演会「国際的芸術家としてのロダン」(講師：カトリーヌ・シュヴィヨ氏) 副担当

小計 18 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- 1 京友会卓話「宝塚レビューは静岡発！？—白井鐵造とレビュー『パリゼット』」
- 2 ジャポニスム学会学芸員勉強会代表幹事
- 3 文化庁新進芸術家海外派遣研修 (短期)

小計 3 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 0 本

合計 22 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 5 月 10 日

職・氏名 上席学芸員 ・ 南 美幸

- 専門分野 美学・美術史
- 所属学会 美術史学会、日仏美術学会
- 主要研究テーマ 西洋美術史、ロダン関連

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

小計 0 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- 1 企画展「没後百年 日本写真の開拓者 下岡蓮杖」 担当
- 2 企画展「下岡蓮杖」 フロアレクチャー 1 回
- 3 企画展「下岡蓮杖」 ミニ・コンサート 企画・立案
- 4 企画展「下岡蓮杖」 実技講座 企画・立案・実施

小計 4 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- 1 静岡県博物館協会講習会 企画・実施

小計 1 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 本

合計 5 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 19 日

職・氏名 上席学芸員 新田建史

- 専門分野 美学美術史
- 所属学会 地中海学会、保存修復学会
- 主要研究テーマ 西洋 16～18 世紀美術、東西美術交流史、東西版画史、文化財保存

1. 今年一年間に執筆した主な論文

(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

- ・「二見彰一氏作銅版面の柳本一英氏による刷りについて」、『静岡県立美術館紀要』、2014 年度、第 30 号

小計 1 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- ・「風景解剖学展」 副担当
- ・「学芸員によるフロアレクチャー」12 月 13 日 (土)
- ・「風景解剖学展特別講演会」12 月 7 日 (日)
- ・「西洋の絵画一面材とともに」展担当
- ・「学芸員によるフロアレクチャー」9 月 21 日 (日)、10 月 5 日 (日)

小計 5 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- ・シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」パネラー 10 月 30 日 (木)
- ・「静岡県博物館協会防災 DIG 実施」於上原近代美術館、上原仏教美術館、2 月 28 日 (土)
- ・「伊豆市美術館建設準備委員」

小計 3 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

- ・「二見彰一と日本の戦後現代版画について (抄)」、『アマリリス』、2014 年、No. 115

小計 1 本

合計 10 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 18 日	
職・氏名	上席学芸員・村上敬
●専門分野	日本近代美術
●所属学会	美学会、美術史学会、文化資源学会、明治美術学会等
●主要研究テーマ	日本近代洋画史
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	<p>・「江戸の室内風俗図から明治の外光派少女風俗画へ——少女洋画史への試み」(『美少女の美術史』青幻舎、2014年7月)</p> <p>・「日本・スイス関係年表」(『スイスデザイン展カタログ』キュレーターズ、2015年1月)</p> <p style="text-align: right;">小計 2 本</p>
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	<p>・企画展「佐伯祐三とパリ」展副担当</p> <p>・企画展「美少女の美術史」展主担当</p> <p>・収蔵品展「静岡ゆかりの日本洋画——近年の御寄贈品を中心に」担当</p> <p style="text-align: right;">小計 3 本</p>
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	<p style="text-align: right;">小計 0 本</p>
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	<p style="text-align: right;">小計 0 本</p>
合計 5 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 30 日	
職・氏名	上席学芸員 川谷承子
●専門分野	現代美術
●所属学会	
●主要研究テーマ	戦後の日本美術
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
	小計 0本
2. 今年1年間に携わった展覧会及び普及事業	
新収蔵品展 石田徹也展ーノート、夢のしるしー めぐるりアート静岡 エデュケーターを招いたワークショップ	
	小計 3本
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
寄贈作品の受け入れ (19点) 石田徹也作品のベニスビエンナーレへの貸出 (3点)	
	小計 2本
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
石田徹也展関連イベント 美術講座「石田徹也の時代」	
	小計 1本
合計 6本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 5 月 20 日

職・氏名 上席学芸員・石上充代

- 専門分野 近世近代の日本画
- 所属学会 美術史学会、近世絵画研究会
- 主要研究テーマ 日本近世近代絵画史

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

小計 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- 1 企画展『下岡蓮杖』副担当
- 2 同展 フロアレクチャー 1 回
- 3 企画展『アニマルワールド』副担当
- 4 企画展『風景解剖学』副担当
- 5 同展 フロアレクチャー 2 回
- 6 同展 親子鑑賞講座 2 回
- 7 収蔵品展『富士山の絵画』担当
- 8 同展 フロアレクチャー 1 回
- 9 『新収蔵品展』フロアレクチャー 1 回
- 10 ボランティア総会 3/14

小計 10 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 本

合計 10 本

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 1 日	
職・氏名	学芸員 浦澤倫太郎
●専門分野	日本美術
●所属学会	美術史学会
●主要研究テーマ	近世絵画
1. 今年一年間に執筆した主な論文 (カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)	
小計 0 本	
2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業	
<ul style="list-style-type: none"> ・企画展『風景解剖学』(主担当) ・收藏品展『人を描く』 ・ART+ (アートプラス) 	
小計 3 本	
3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動	
小計 0 本	
4. 収蔵作品に関する論文・発表等	
『都鄙図屏風をめぐる』(アマリリス 114 号)	
小計 1 本	
合計 4 本	

調査・研究に関する自己点検 報告書

提出日 平成 27 年 4 月 17 日

職・氏名 上席学芸員 泰井良

- 専門分野 日本近代洋画、ロダン、美術館評価、ミュージアムマネジメント
- 所属学会 美術史学会、明治美術学会、日本ミュージアムマネジメント学会
- 主要研究テーマ 明治美術会から太平洋画会、明治から昭和期の美術

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

- ・論文「曾宮一念《毛無連峯》に関する試論～「もうひとつの絶筆をめぐって」(『静岡県立美術館紀要』第 30 号 平成 27 年 3 月 31 日)
- ・論文「黒田清輝《富士之図(六点)》について(静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No. 116 平成 27 年 1 月)

小計 2 本

2. 今年 1 年間に携わった展覧会及び普及事業

- ・移動美術展「日本人の油彩画」
- ・収藏品展「静岡ゆかりの洋画家」展フロアレクチャー(6/22)
- ・移動美術展フロアレクチャー(10/12)
- ・移動美術展フロアレクチャー(11/16)

小計 4 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

- ・「和田英作と近代の富士山」【裾野市生涯学習センター】平成 27 年 2 月 19 日
- ・一般財団法人地域創造公立美術館活性化事業企画検討委員
- ・全国美術館会議地域美術研究部会幹事
- ・三重県総合博物館(みえむ)評価部会副部会長

小計 4 本

4. 収藏品に関する論文・発表等

- ・論文「曾宮一念《毛無連峯》に関する試論～「もうひとつの絶筆をめぐって」(『静岡県立美術館紀要』第 30 号 平成 27 年 3 月 31 日)
- ・論文「黒田清輝《富士之図(六点)》について(静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No. 116 平成 27 年 1 月)

(小計 2 本)

合計 10 本

定性評価の状況（平成 26 年度）

【没後百年 日本写真の開拓者 下岡蓮杖展】〈自主企画展〉

- ・ 写真を魔術のように恐れ、モデルのなり手がない時代から、今日の盛んな写真活況時代へと移り変わってきた。蓮杖もこれほど写真が、カメラマンが出現するとは考えられなかったであろう。芸術写真なる用語も生まれたが、日本美術史においても写真が絵画を変革させたのである。それ故写真というものの発生・展開を考えることのできるよい企画であり、それも本県出身であるので、何年後かに再度視野を変えた写真展を構想してほしい。(金原委員)
- ・ 下田出身で静岡県ゆかりの下岡蓮杖の大変充実した展覧会で、静岡県立美術館で開催されることに大きな意義があった。近年、写真も美術の範疇に入れられるようになったが、幕末明治初期においては書画との関係が深いので、写真のみを取り上げるのではなく、絵画や版画などをともに展示した今回の展覧会は、蓮杖その人についても、また幕末明治という時代についてもわかりやすい構成となっていた。(山梨委員)

【アニマルワールド-美術のなかのどうぶつたち展】〈自主企画展〉

- ・ 風景画の多い県立美術館で、動物画を取り上げ、その絵画としての奥深さ、魅力を知らしめたところ。子どもたちにも喜ばれたことであろう。(金原委員)
- ・ 新出作品が少なからず含まれるなど、総じて充実した展示であった。学芸員の日常的調査があったからであろう。(榊原委員)

【美少女の美術史展】〈自主企画展〉

- ・ 「美少女」という概念の曖昧さについて、明確にすること自体無意味なのではなかろうか。客寄せ用の「美」を除いた「少女」についての日本的な独自性を考えてよいのではなかろうか。ジェンダーの問題の一つがここに現れているのではなかろうか。女性の権利は敗戦後憲法では男性と対等になったが、実質的には近年の世界での調査では105位である日本で、女性を対等な大人の対象とすることができないこと(女性は弱い、小さい、力がない、涙っぽい、依存心が強い、etc.)と少女性とが不可分のものになっているのではなかろうか。少女歌劇が戦前から根強い人気をもっておるが、恐らく日本独自の存在ではないのか。なぜ日本独自なのか、考える必要があるはずではないのか。(坂本委員)
- ・ 興味深いテーマではありながら、客観的なアプローチが難しく、公的展覧会としては構成しにくい主題であるが、ジャパン・クールが国際的に注目され、若年層に「きれい」「かわいい」が広く受け入れられる現状を踏まえて、少女の中でも「美」的観点から高い評価を得ている「美少女」に美術館が取り組んだことを評価したい。来館者に少女とその家族連れが多かったという特色があったことは、新たな来館者の獲得という意味があっただけでなく、日本における「美少女」の社会的位置を考えるための材料としても注目される静岡県立美術館が狭義の「美術」展覧会としても本格的なものを次々で行う一方で、サブカルチャーをも入れた広義の「美術」(あるいは「美術」に入らない「アート」)をも視野に入れ、現代の視覚を問う場となっていることを高く評価する。(山梨委員)

【静岡県立美術館コレクション展 風景解剖学-古今東西、風景画のしくみ】(自主企画展)

- ・ 静岡県立美術館のこれまでのコレクションを十分に活用し、新たな視点で構成してみせた独創的な展覧会になっていた。のみならず、鑑賞者にも楽しんでもらえる、判り易い展覧会だったと思う。それが一館だけのコレクションでできることは誇るべきことだと思う。(潮江

委員)

- ・ 館藏品と寄託品という限られた手駒の中での企画展であるだけに、作品選択は自ずから限界がある。その中で、人、大地、山、建築、道、水、空の7本の柱を設定できたのを多とした。静岡県立美術館の風景画・山水画コレクションの底力を見せた展示というべきか。(榊原委員)

【石田徹也-ノート、夢のしるし】(自主企画展)

- ・ 没後10年の展覧会が、本展覧会とすれば、さらに10年後、彼が生きた時代がどのように意味づけられていくかによって、彼の作品の意味付けもまた変化していくだろう。その折には、さらに深く、社会の変化の荒波の中でプロテストしつつ、必死に生きた若者の絵画による発言がどのような意味を持っていたかがさらに深くかつ客観的に問い直されるだろう。それを期待している。(潮江委員)
- ・ 西洋ではドーミエの新聞に載った版画(『シャリヴァリ』)など、社会の窓としての作品があり、それなりの価値を認められている。石田は、1955年から10年間という短い期間で合ったものの自らを傷つけながら、作品=自分自身を生み出した。それは時には両性具有であったが、非日常の自分を(自画像ではないと言っているが)「とにかく、かく」。それが途中で挫折した。時代の証言として、この展覧会と作品は重要なものとなるであろう。(金原委員)

(西洋)

近年、当館収蔵品の海外での公開が増加している。今年度は、クロード・モネ《ルーアンのセーヌ川》を、アメリカ合衆国のヒューストン美術館で開催された「セーヌ川のモネ：川の印象」展に出品した。モネが取り組んだ数多くのモチーフの中から「セーヌ川」に的を絞り、欧米各国から貸し出された50余点の作品を、描いた場所や時間などによって5つのパートに分類・構成した本展において、当館作品は初期の代表作の一つとして紹介された。本作が海外展に出品されるのは4度目（アメリカでは2度目の展覧）で、当館コレクションでは最多の海外公開である。これは、当館の存在とコレクションが欧米で周知されつつある証左であり、かつそれをさらに広める機会ともなった。

(日本画)

フィラデルフィア美術館「狩野派特別展 Ink and Gold: Art of the Kano」に13件を貸し出し、出品作品中の重要な一画を占めた。川越市立美術館「柳沢吉保とその時代」展へも狩野派作品3件を貸し出しており、これらは当館コレクションの重要な柱である狩野派作品群の充実を示す機会となった。また静岡市美術館・練馬区立美術館「没後100年 小林清親展」に24件を出品、静岡ゆかり作家の久々の大規模回顧展に貢献した。平塚市美術館「横山大観の富士」展には3件を出品した。各時代における大観の富士の特徴をよく示す作品であり、質量両面における当館の富士山図コレクションの豊かさを示すものとなった。いずれも当館が力を入れてきた特徴あるコレクション形成が実を結び成果となって表れたものといえる。

(現代)

石田徹也作品21点が、平塚市美術館、砺波市美術館で開催された、「石田徹也展—ノート、夢のしるし」に出品された。同展覧会は、平成25年度から平成26年度にかけて国内4会場を巡回し、当館が最終会場であったが、静岡県焼津市出身の美術家の作品を県内外で紹介し、認知度を高める好機となった。また、金沢健一《音のかげら2》が、「発見！キッズアート！—こども・コラボ・みゅーじあむー」展(NPOキッズアートプロジェクトしずおか)に出品された。マレットで叩いて音を出しながら、素材の質感や、造形の面白さを味わうことができる同作品は、展覧会で好評を博し、小学生やその保護者に、芸術に関心を持ってもらうための入口としての役割を果たした。

(日本洋画)

平成26年度の日本洋画の公開・貸出については、充実した回顧展への貸出が顕著であった。

「生誕140年 中澤弘光」展(三重県立美術館・そごう美術館)には、当館の代表作《風景(秋の湖畔)》が出品された。1980年(昭和55年)に奈良県立美術館で開催されて以来の今回の回顧展では、文展及び白馬会展に出品された油彩画に加えて、本の装丁や中澤が旅の途中に集めたコレクションなども展示され、中澤弘光の知られざる一面に焦点が当てられた。その中で、当館所蔵作品は、第三章「回想の旅」というセクションに位置付けられ、油彩画制作としての本作の位置づけに加えて、旅によって中澤が得た様々なインスピレーションという新たな視点が加えられた。

「生誕110年 海老原喜之助」展(鹿児島市立美術館・下関市立美術館・横須賀美術館)にも、当館所蔵《かぜ》が出品された。本展は、これまで未発表だった海老原の素描類がまとまって鹿児島市立美術館に寄贈されたことにより、海老原の空白の時代の研究が進んだことによる成果である。当館所蔵作品は、海老原ブルーの代表作として知られる《船を造る人》(北九州市立美術館蔵)と並

べて展示され、改めて作品が持つ力強さを感じることができ、また当館所属作の意義を確認することができた。

①研究紀要 新田建史「二見彰一氏銅版画の柳本一英氏による刷りについて」

(坂本委員)

独立した二人の美術家の間に起こった技法の伝達・解明の記録として、例のない試みであると思う。「言語化」と言っても、技術的・体験的要素が簡単に言語化・客観化されるものではないと思われるが、それでもこの試みは評価されてよいのではなかろうか。版画は元々、用具や技法、印刷機などの外的（あまりよい言葉ではないが、美術家の心身の働きを「内的」と形容すれば「外的」という言葉にご理解を得られようか？）要素に依存するところが大きいとされてきたが、それだけに原版制作、インク、刷り、用紙の性格・湿度など、複雑で微妙な問題を経過することも、改めて認識させられた点でも、興味深い研究だと思われる。

(潮江委員)

これまでの美術館活動の成果とも言える試みであり、その独自性は高く評価できる。何よりも、二見のメゾチントっぽいアクアティントの創作の秘密の一部を垣間見ることができたことは素晴らしいことだと思う。また、芸術家はその独創性を発揮することを通してではなく、むしろ忠実な復元を心がけることによって微妙なニュアンスに潜む作品のポイントに、それを試みた芸術家が芸術家が出会ったであろうことと、立ち会った執筆者もそれを目撃できたことの意義は大きいと思う。

②研究紀要 三谷理華「ラファエル・コラン(1850-1916) -関連一次資料類にみる画家を取り巻く交友の諸相」

(坂本委員)

少ない資料をよく発掘したという点に何より感心した。有名な割によく分からなかったコランの姿を、ロダンなどとの交流から浮き上がらせたのは功績だと思う。アメリカ人との関係も初めて知って少し面白かった。

(山梨委員)

日本の近代美術に大きな影響を及ぼしたラファエル・コランの一次資料を悉皆的にリスト化し、原文を翻刻して和訳しており、貴重な資料を公にした地道な調査活動と歴史家としての姿勢が高く評価される。また、それらの資料から、コランとロダンの交流、両者の相互の作風の評価、同時代におけるコランの作風の評価の一端、日本美術と古代ギリシア美術の共通点が広く認識されていたことなどを読み取っており、今後の美術における日仏交流の歴史の論考に資するものとなっている。

③研究紀要 泰井良「曾宮一念《毛無連峯》に関する試論～「もうひとつの絶筆」をめぐって～」

(金原委員)

所蔵作品を取り上げて、曾宮作品の成立、深化を考察する短文ながら、ピリッとした好論文である。画家は「家の前に立てば、富士の東に愛鷹、西に毛無山が連なり、麦も私にはよい画題になった」（昭和60年5月18日）と述べている。曾宮風景の背後に秘められた記憶・イメージを探り出す清新な問題意識に立つ論文である。

(山梨委員)

本稿は、曾宮一念自身が絶筆と位置づけた《毛無連峯》と、遺族の証言によってその後に制作されたことが明らかな《失題 毛無山》との比較から、曾宮にとって「絶筆」と評価したい作品がどのような造形の質を持っていたかを明らかにし、彼が理想とした風景画の制作態度を探っている。曾宮の風景画への姿勢については、より深く掘り下げる余地はあるものの、曾宮がほとんど視覚を失った時期に描かれた《失題 毛無山》に記憶と心象の表出を認めて、本作に作家自身の評価とは異なる価値づけを行った点を評価する。

- ・ 「美術館教室」事業を継続的に行ってきたことにより、学校教育との連携機会が増えてきた。
- ・ とりわけ今年度は粘土貸出の件数が増加し、学校現場が自力で「粘土教室」を開催する地力がつき始めたことをうかがわせた。「指導者向け粘土講習会」などの継続的開催の成果の一端と考えられる。
- ・ 実技系プログラムでは、前年度に引き続き、企画展・収蔵品展にかかわりのある内容の実施をより心がけた。参加者の鑑賞・制作両面からの美術への理解が深まるとともに、美術館ならではのプログラムとなった。
- ・ 学校団体向けボランティアとの鑑賞ツアーの利用数も増加しており、学校現場での鑑賞教育に対する需要の高まりをうかがわせる。
- ・ 前年度は工事休館により利用数が減となっていたロダン館関連のプログラムだが、本年度の利用数は回復傾向をみせている。

- これまでの地域等の連携をさらに深め、地域をパートナーと考える経営を推進した。
さらに地域企業との連携のあり方を検討した。
- (1) 美術館ボランティア草薙ツアーグループによる来館者サービスお茶会の実施。4回。
- (2) 平成 25 年 4 月に、有度山地域に立地する 5 施設（県立美術館、SPAC、日本平ホテル、日本平動物園、久能山東照宮）により締結した「有度山フレンドシップ協定」による協働。
 - ・静岡県大型観光キャンペーン推進協議会（静岡県観光協会）が主催する「ふじのくに観光大商談会」に参加し、フレンドシップ施設を一体の地域としてPRした。
東京、名古屋、大阪、計 3 回
 - ・日本平動物園と美術館とで、団体料金を適用させた割引共通チケットを販売。
企画展「アニマルワールド」
 - ・日本平ホテルと美術館とで 企画展観覧チケット付宿泊プランを販売。
企画展「佐伯祐三とパリ」、「アニマルワールド」
 - ・静岡市スポーツ振興課が主催する「ベースボールクリスマス 2014IN 静岡」（草薙球場）にて、ブースを出展し、来場者にフレンドシップ施設を一体の地域としてPRした。
- (3) 草薙商店会との協働。
 - ・草薙商店会と「つながるくさなぎ実行委員会」が共催する「つながるくさなぎフェス」にブースを出展し、実技教室を実施した。夏フェス、冬フェス 計 2 回。
- (4) ロダン館 20 周年記念事業「ロダンウィーク」において、「草薙マルシェ実行委員会」（草薙商店会主体）が美術館正面玄関前モニュメント広場にてマルシェを開催。約 3,300 人を集客した。
- (5) 静岡大学と連携し前期授業単位に認定した「大学生によるロダン館ギャラリートーク」の実施（平成 26 年 7 月 6 日、12 日、13 日、11 月 3 日 4 日間）
- (6) タウンミーティングの開催
 - ・県立美術館友の会「友の会と美術館の連携について」等（平成 26 年 8 月 21 日）
 - ・県立美術館ボランティア草薙ツアーグループ、杉山彦三郎選抜品種茶保存会「杉山彦三郎記念茶畑の管理について」等（平成 27 年 2 月 19 日）
- ムセイオン静岡の取組

谷田地域の文化教育 6 機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ）が多分野における連携を進め、更なる文化の情報発信を目指し、次の事業を実施した。

 - (1) ムセイオン静岡協働イベント「文化の丘フェスタ」（10 月 25 日～11 月 9 日）事業を開催。
当館ではロダン館開館 20 周年記念事業（再掲）を実施。
 - (2) ムセイオン静岡協働イベント「リベラルアーツ×ジャパノロジー」講座（全 8 回）を開催。
第 2 回の講座では当館館長が講演。
 - (3) 「富士山」関連イベントの開催
富士山の絵画展（平成 27 年 1 月 24 日～3 月 1 日）

【広報活動】

- ・企画展を中心に、より多くの県民に情報が届き、展覧会への関心を持ってもらえるよう、様々な広報手段を活用し、広報の推進を図るとともに、リアルタイムな美術館情報が入手できるようHPの活用を図った。
 - ・また、フェイスブックを開設し、新鮮な話題をアップすることで情報の拡散を図った。
 - ・さらに、美術館ニュース「アマリリス」をリニューアルし、県内外の美術館等関係機関に送付して当館の情報発信を行った。
- (1) ホームページ 《アクセス数： 243,000 件 (H26) 》
 - (2) 展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供
 - (3) ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り
 - (4) 県広報課との連携（県民だより、県政番組、ラジオ番組出演）
 - (5) 広報サポーターへの情報提供
 - (6) 展覧会共催者（新聞社・テレビ局）、協賛者（JR東海、鈴与グループ）との連携
 - (7) 美術館ニュース「アマリリス」の発行（4回/年）

【新たな取組】

- (1) 下田市出身である「下岡蓮杖」を取り上げた「下岡蓮杖展」においては、地元、下田商工会議所が立ち上げた観光PR「蓮じいプロジェクト」と連携し、当館にて蓮じいプロジェクト関連商品を販売するブースを設置するなど相互にPRの協力体制をとった。
- (2) フレンドシップ協定施設間で相互のPRとなる広報を行った。
 - ・「佐伯祐三とパリ」展及び「アニマルワールド」において、日本平ホテルと協働し観覧券つき宿泊パックを販売。
 - ・「アニマルワールド」において、日本平動物園と協働し、両施設団体料金で利用できる共通チケットを販売。
また、日本平ホテルフロントに「樹花鳥獣図屏風」レプリカを展示。
- (3) JR東海が企画した「アート&トレイン」に参加。団体料金を適用した観覧券とポストカードのプレゼントなどを実施。
- (4) 「美少女の美術史」展においては、ソフトドリンク無料サービスの「レディースデー」や前売券購入特典プレゼント、展示作品から選出する「美少女コンテスト」、ポスターの販売など、あらたな企画を試みた。
- (5) 1月2日の正月開館日に「おしるこ」の無料サービスを行った。
事前にホームページなどで広報したため、これを目当てに来館された方も多く居た。
- (6) 静岡市、草薙商店会、県立大学、自治会等が主催する、草薙駅周辺の賑わいを創出するイベント「つながるくさなぎフェス」において、実技体験のブースを出店。
- (7) ロダン館20周年記念事業（ロダンウィーク）において、草薙商店会を中心にした「草薙マルシェ実行委員会」が、館正面玄関前のモニュメント広場で雑貨&グルメを提供する「マルシェ」を開催。また、美術館友の会の協力を得て「にがお絵広場」も同時に行い、全体で約3,300人の集客ができた。
- (8) 「石田徹也展」では、作家の出身地である焼津市内の全小中高校生にチラシを配布し地元出身の偉大な作家の企画展をPRした。

【平成 26 年度第三者評価委員での意見と対応状況】

〔1〕 達成目標等に対する二次評価

基本方針	意見	対応状況
A	多様性に富んだ社会を実現するため、展覧会の全体構成の評価が必要である。	展覧会構成とその評価については、「静岡県立美術館中長期計画」に基づいた展覧会の中長期展望を策定したうえで、短期的な展覧会構成を検討していく。また、効果的な評価方法についても併せて検証していく。
	美術作品を保存し、継承していく役割についても評価の対象とすべきである。	今後、評価指標の見直しの中で検討していく。
	目標設定が妥当であったかどうかという自己評価も含め、その原因の分析評価が必要である。	目標設定については、過去5年間の実績を基準にして、必要な見直しを図るとともに、県の文化政策に照らして、新たな目標を設定していく。
	県民が求めている展覧会を美術館が把握しているのか見直す必要がある。	地域、学校、団体等から美術館への意見を伺うタウンミーティング（年2回開催）で、展覧会、教育普及、館のサービス等様々な要望を把握している。
	観覧者数目標値は過去5年の平均値とするなど、現実的な設定とすべきである。	観覧者数については、過去の実績をもとに、より現実的な数値設定を行っていく。
	なぜ近代美術を県立美術館が取り上げるのか、その展覧会の意義をアピールすべきである。	かつての近代美術ブームに比べて、現在、その集客力や影響力は小さくなりつつある。近代美術が、現代社会において、どのような価値を創造したのを併せて検討していきたい。
	他の美術館・大学と連携することにより何が強化されたか自己評価すべきである。	近年、他の美術館との連携した企画展の開催、大学と連携した様々なプログラムを実施しているが、今後は、戦略的な計画・方向性について、最も効果的な方法を検討していく。
	鑑賞教育を中心とした教育普及の	鑑賞教育については、現在、過渡期

	成果は、具体的な自己評価の記載が求められる。	にあり、評価方法が確立していない現状がある。今後、その手法についても検討していく。
B	移動美術展はマンネリ化しており、地域の要求に沿って開催されたい。	これまでの名品展から、学芸員によるテーマ展示に内容を改善し、また施設のファシリティを考慮しつつ、できる限りの優品を出品するようにした。今後は、自治体や関係団体との様々な連携を図っていく。
C	広報戦略については、静岡らしさの表現も含め、具体的に何をやるべきか検討が必要である。	平成 25 年度から「県立美術館中長期計画(H26～H33)」を作成しており、その中で静岡県立美術館や静岡にゆかりのある作家の展覧会等の開催や広報を盛り込み実施していく。
	カリエール展など、ロダンに関する理解を含める併設企画をすべきである。	ロダンについては、企画展、ロダン館の活用も含めて、今後、様々な取組を検討していく。
D	ミュージアムショップは設置場所・内容等他館の事例を分析して検討されたい。	施設リニューアル検討をしている中で、先進他館の事例を評価し、ショップの展開についてもリニューアルの要素として検討していく。
	アクセスバスの便数削減について、バス会社に申し入れを行うべきである。	かつてバス会社に増便の申し入れをしたところ、乗降者数が少ないことを理由に断られた経緯がある。美術館利用者数の増加対策と併せて、今後、バス会社への協力を依頼していく。

〔2〕 県庁の支援体制に対する一次評価

意見	対応状況
日本で唯一のロダン館を、県の誇りとして全国に知らしめるべきである。	「ロダンウィーク」の継続的な実施等により、平成 29 年度のロダン没後 100 年に向けたロダン館の活性化を図っていく。
県立美術館の存在感をより高めると共によりよき経営戦略の実現を期待する。	他の県立施設との連携を強化することで県立美術館のプレゼンスの向上を図っていく。

平成 26 年度 設置者の取組状況

(1) 第 3 期文化振興基本計画の推進

平成 26 年 4 月策定の第 3 期文化振興基本計画において定めた美術館が果たすべき役割等について、美術館と協働して推進している。

(2) 中長期計画の推進支援及びプレゼンスの向上

平成 26 年 4 月策定の「県立美術館中長期計画」を推進するため、美術館職員とともに、本計画の内容や将来展望について共通認識を持ち、計画的な取組みを支援するとともに、他の県立施設や周辺施設との連携を強化し美術館のプレゼンスの向上を図っている。

(3) 美術館の会議等への出席

- ・月 1 回開催されている美術館企画運営会議に文化政策課長が出席して情報共有を図っている。
- ・美術館の広報委員会や施設環境整備委員会に職員が出席し、県庁が持つ広報媒体の情報提供や技術支援を行った。

(4) 中学生の美術館展覧会鑑賞推進事業の推進

中学生を対象とする鑑賞事業の実施にあたり、教育委員会を通じて県内の全中学校に趣旨や実施方法について情報提供するとともに、バスによる送迎業務を行った。

内容に関する問合せ先

静岡県文化・観光部文化政策課

〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町 9 番 6 号

TEL 054-221-3506

静岡県立美術館総務課

〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田 53 番 2 号

TEL 054-263-5755